

労働映画百選通信 No.15 2017.02

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

日本の労働映画百選

<http://hatarakubunka.net/>

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで!“働く姿”を描いた百本をセレクト

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意味と喜びをどのように描いてきたのか。働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から百本を選びました。

労働映画鑑賞会

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に「労働映画鑑賞会」を開催しています。どなたでも参加できます。お気軽にご来場ください。

第36回 ～仕事に夢を持つ～

・開催日: 2016年 3月 9日(木) 18:00～ (参加費無料・申込不要)

・会場: 連合会館 201会議室 (地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

・上映作品 **夢は牛のお医者さん**

2014年/86分 製作/テレビ新潟 監督/時田美昭 【労働映画百選 No.97】

1987年、クラスで牛を飼うことになった小学3年生の少女が、成長して獣医になるまでの26年間を記録したドキュメンタリー。一途に夢を追い、やがて実現させた女性の物語。



【上映情報】労働映画列島！2月～3月 ※《労働映画列島》で検索！<http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00170303>

◎新作ロードショー

汚れたミルク／あるセールスマンの告発 《3月4日(土)から 東京 新宿シネマカリテほかで公開》
パキスタンで起きた実話を映画化。自分の売った粉ミルクが子どもたちを危険に晒していることを知ったセールスマンが、告発に立ち上がる。(2014年 インド＝フランス＝イギリス 監督/ダニス・タノヴィッチ) <http://www.bitters.co.jp/tanovic/>

新地町の漁師たち

《3月11日(土)から 東京 ポレポレ東中野ほかで公開》
東日本大震災で被災した福島県新地町の漁師たち。津波と原発事故で一変した暮らしを、3年半にわたり記録したドキュメンタリー。(2015年 日本 監督/山田徹) <https://www.yamadatoru.com/>

わたしは、ダニエル・ブレイク

《3月18日(土)から 東京 ヒューマントラストシネマ有楽町ほかで公開》

ケン・ローチ監督最新作。病気により失職した初老の男が、若いシングルマザーと出会ったことから、複雑な現実に向かい決意する。(2016年 イギリス＝フランス＝ベルギー 監督/ケン・ローチ) <http://danielblake.jp/>



◎名画座・特集上映

【札幌シネマフロンティアほか 全国55館】2/25～3/24「午前十時の映画祭」…浮雲／愛と哀しみの果て

【東京 ラピュタ阿佐ヶ谷】2/19～4/15「松山善三・高峰秀子」…綴方教室／われ一粒の麦なれど／典子は、今／他

【東京 シネマヴェーラ渋谷】2/25～3/17「新東宝のディーブな世界」…孔雀の園／女の暦／若い人たち／他

【東京 神保町シアター】3/4～31「夏目漱石と日本の文豪たち」…吾輩ハ猫デアル／集金旅行／私が棄てた女／他

【東京 新宿 K's cinema】3/4～17「空族(KUZOKU)サーガ」…国道20号線／サウダーヂ／かたびら街／他

【東京 シネマヴェーラ渋谷】3/18～31「偉大なるフレデリック・ワイズマンII」…法と秩序／病院／肉／競馬場／他

【東京 池袋 新文芸座】3/19～31「追悼 松方弘樹」…恐喝こそわが人生／流れ板七人／テキヤの石松／他

【秋田 週末名画座シネマパレ】2/23～26「最終上映」…太陽を盗んだ男／男はつらいよ 寅次郎純情詩集

【君津市民文化ホール】3/2・3「木下恵介傑作集」…二十四の瞳／喜びも悲しみも幾歳月／カルメン故郷に帰る／他

【京都 立誠シネマプロジェクト】2/25～3/3「歴史は我らのもの」…チリの闘い／マテリアル／パルチザン前史／他

【神戸 パルシネマしんこうえん】3/3～15 湯を沸かすほどの熱い愛／クレイマー、クレイマー(2本立)

【三原リージョンプラザ】3/11・12「昭和の女女優映画祭」…雪国／夜の河／五番町夕霧楼／他

【米子市公会堂】3/4・5「米子なつかしの名画劇場」…遠雷／お引越し／ロックよ、静かに流れよ／櫻の園

【福岡市総合図書館 シネラ】3/1～5「ロシア・ソビエト映画傑作選」…外套／落葉／獵人日記 狼／他

【作品ガイド】『ブルックリン』 Brooklyn

2015年/111分 アイルランド=イギリス=カナダ 監督/ジョン・クローリー
《1950年代前半、アイルランドの田舎町からニューヨークのブルックリンに移民として渡った女性・エイリッシュ(シアーシャ・ローナン)の姿を瑞々しく描く。アカデミー作品賞、主演女優賞、脚色賞の3部門にノミネートされた。》



自立～ここが私の生きる場所～ 文:清水洋子

春は門出の季節。「どこで仕事をするか？」を選ぶことは、その後の人生を大きく左右することを、この映画は教えてくれる。わたしは見終えた瞬間、思い出した本があった。村上春樹さんのエッセイ『辺境・近境』。故郷の神戸を、震災後に歩いた時の様子を綴っている。

＜世の中には故郷にたえず引き戻される人もいるし、
逆にそこにはもう戻ることができないと感じ続ける人もいる＞

【DVD】20世紀フォックス

わたしの場合、大学への進学を希望していたが、自宅から通える大学は皆無。ロンドン～パリ間より遙かに遠い田舎から上京。兄は田舎で就職したので、両親からは「どうぞ、お好きに」と告げられ、東京で就職。両親は早くに亡くなり、その後、東京にお墓がある人と結婚したので、田舎に戻る可能性は限りなくゼロに近い。

この映画の主人公・エイリッシュは、アイルランドの海辺の田舎町で暮らす内気な乙女。田舎の雑貨店で、店主の意地悪に耐えながら働く妹の将来を案じた姉は、大西洋の向こうの大都会・ニューヨークのデパートで働くよう背中を押す。アメリカに渡る船で同室になった女性から「知らない人と話すのは、いいものよ」と教えられたが、見知らぬ街で見知らぬ人々に囲まれ、エイリッシュは深いホームシックに陥る。帰りたいくても、帰れない。しかし、多種多様な人々がたくさん共存する都会では、彼女の才能や魅力を発見し引き立ててくれる人が、職場にも寮にも現れる。田舎では慣れ親しんだ人々の間の限定された交流に終始しがちだが、都会は知らない人と関係を築くことで、世界を広げることができる場所なのだ。

都会は仕事する上での選択肢も多い。彼女はデパートの売り子に留まらず、大学で簿記を学ぶ。洗練された文化の影響を受け、ファッションセンスも磨かれてゆく。しかしニューヨークでの生活に慣れ親しんだ頃、姉の訃報が届き、エイリッシュは急に故郷のアイルランドに帰国することに。

夢にまで見た故郷。懐かしい家族や友達との再会。ニューヨークでの暮らしを経て、エイリッシュが魅力的な女性に成長したことは、たちまち田舎中の噂になる。彼女に恋する男性も現れる。しかし、都会風をビュンビュン吹かせた結果、彼女に訪れるのはいいことばかりではなかった。「昔の、内気でおぼこい娘ではないのね」と烙印を押され、挙句、今のエイリッシュを快く思わない人に貶められそうになる。

長い間、故郷を離れているうちに、いつの間にか故郷を美化してしまうことは、わたしにも覚えがある。エイリッシュは言う。「こういう所だってこと、思い出したわ」。ネガティブな体験は、時に人を目覚めさせる。彼女は「自分が何者であるか?どこで生きるか?」をはっきり自覚する。長女を失った母親は、あの手この手で次女を手元に置こうとするが、エイリッシュは葛藤の末、ニューヨークで生きる道を選ぶ。ひとりの人間に体はひとつ。身を切られる思いで母に別れを告げる。自立することは、切なさを引き受けることでもある。

『ブルックリン』を見て思い出した作品があった。ラッセ・ハルストレム監督の『ギルバート・グレイブ』(1993)だ。ジョニー・デップ演じる主人公は、エイリッシュと同様、田舎の雑貨店で働いている。憎めないが面倒な家族の世話をしていた彼は、都会から旅で訪れた少女に恋をする。けれど家族を見捨ててまで、彼女を追うことはしない。

「生きる場所」を選ぶことは、故郷への愛の深さとは比例しない。今でも家族構成や、親族の生老病死に影響を受けることは、現実にも多いのではないだろうか?エイリッシュは遠く離れたアメリカで、望郷の思いを抱き続けながら生きてゆくだらう。『ギルバート・グレイブ』のジョニー・デップは「田舎も家族も面倒……」と思いつつも、自分から振り切ることはなさそう。けれど、どんな場所で生きようと誰かのせいにならずに、＜ここは自分が選んだ場所＞と自覚した時、人は自立の道を歩みはじめると思う。

勇気を出して、新しい世界へ!

しみず・ようこ…1967年生まれ。テレビディレクターとして26か国で労働。現在は主婦業とともに、福祉系NPOで労働中。

【労働映画のスターたち】第16回「新垣結衣と森川葵」 文:波多楽久

オンナの進路は家探しから!?「家活」ドラマのヒロインたち

去年の10~12月に放送された秋の連続ドラマは、「女性の生き方」を描いた番組が特に多かった。石原さとみ主演の『**地味にスゴイ! 校閲ガール・河野悦子**』(日テレ)、吉田羊の『**レディ・ダ・ヴィンチの診断**』(関テレ=フジ)など、特色ある職場を舞台にした「お仕事ドラマ」が並ぶのはやや恒例だが、そこから更に一步踏み込んで『**ヒロイン**』と『**住まい**』の関係を描く作品が相次いだことは注目に値する。菅野美穂がタワーマンションに転居してきた主婦に扮し、「セレブ」な住民たちとの人間関係を翻弄されるサスペンス『**砂の塔~知りすぎた隣人**』(TBS)。「引越し」という人生の岐路に立つ女性たちに、不動産屋の双子姉妹(大島美幸・安藤なつ)がそれぞれの仕事や生き方に合った物件を紹介する一話完結シリーズ『**吉祥寺だけが住みたい街ですか?**』(テレ東)。中でも毎回惹き込まれて見たのが、「就職先」としての結婚生活を明るく、楽しく(でも大真面目に)描いて今期最大のヒット作になった『**逃げるは恥だが役に立つ**』(TBS)と、「終の棲家」としてのマンション購入を描いた『**プリンセスメゾン**』(BSプレミアム)だ。

『**逃げるは恥だが役に立つ**』という題名はハンガリーの諺にちなんだそうで、その意味は「戦いから逃げても、生き抜くことが大切」。主人公の森山みくり(新垣結衣)は大学院を修了したが就職活動は全滅。父親が定年を機に田舎に移住することになり、住む家にも困ってしまう。「就活」=仕事探しと「家活」=住まい探しの両方を解決する方法として、みくりは独身のサラリーマン・津崎(星野源)に、家事を行う「従業員」としての主婦業を提案する。月給19万4千円、恋愛感情抜き的事实婚生活が始まるのだが……。

周到に練られたコミカルな展開、主題歌に合わせて踊るキュートな「恋ダンス」などで一級の娯楽作品に仕立てられているが、その根底には「**平成のプロレタリア文学**」と呼びたくなるような問題意識が横たわっている。男性中心の企業内で「女性初の管理職」として闘い続ける独身の伯母(石田ゆり子)、「夫の浮気ぐらい我慢してやれ」という世間の眼に反撥するシングルマザー(真野恵里菜)など、みくりの周りの女性たちはみな現実と格闘しているのに対し、男たちはどいつもこいつも**夢見るピーター・パン**…という構図は、「**女性活躍社会**」なるスローガンを掲げたこの国の実態そのもので、なんとも居たたまれない(苦笑)。やがて二人の仲は急接近し、津崎は正式に結婚して「雇用関係」を解消しようとするが、みくりは「それは**好きの搾取**です!」と反論する。こうした異議申し立てが多く女性の本音を代弁していたことも、ヒットの一因だと思う。

一気に国民的スターとなった「ガッキー」こと新垣結衣(あらがき・ゆい)は1988年、沖縄県生まれ。これまでも『**コード・ブルー ドクターヘリ緊急救命**』(2008、フジ)での研修医、『**空飛ぶ広報室**』(2013、TBS)の報道記者など様々な職業を演じてきたが、今回の「契約主婦」のようにトリッキーな設定の方がピタリとハマる気がする。髪型を従来のロングヘアからショートボブに変えたことも、万事において実用性を重んじる聡明なキャラクターづくりに役立った。

一方、『**プリンセスメゾン**』の主な舞台となるのは、都内の分譲マンションのモデルルーム。ほとんどの客がカップルか家族連れという中、いつも独りでやって来る常連の沼越幸は、居酒屋チェーン店で働く26歳。女学生みたくいなおさげ髪、フードの付いたパーカーにリュックサックを背負った「**もっさり女子**」で、華やかな雰囲気のマンションでは異彩を放つ。不動産会社のスタッフも初めは冷やかしかだと思っていたが、コツコツと働いてマンション購入の頭金を貯める幸の真摯な姿勢に触れ、次第に親身になって応援するようになる(他社の物件を見る際に、「兄」に扮してついて行く高橋一生が最高に可笑的)。そして、幸に出会った人々もみな、自分自身の生き方を再検証していく。

各地のモデルルームの「内見」に臨む時、スリッパを脱いでフローリングの感触を確かめたり、キッチンの抽斗の開け閉めを試したりする幸の立ち居振る舞いが、修行中の武道家のようにも見える。一生に一度の大きな買い物、しかもマンションなんて夢のまた夢……そう呟く職場の後輩に、幸は「**やってみるせずに、勝手に卑屈になっちゃだめだよ**」と諭す。確かに20代からローンを組めば、2,500万円の物件でも頭金300万、35年ローンで月々6万円程になるそうで、これならアパートの家賃と変わらない。かつて私の職場の先輩だった女性も、東京で20年暮らしてから東北の地元に戻ることに、「東京に払った家賃で家が買えていたねー」と苦笑いしていた。就職・結婚・家庭……というこれまでの順番に囚われず、まずは「**ひとりで生きる場所**」を確保して、そこから将来を切り拓いていく方法も、人生を俯瞰で見れば決しておかしくないことがわかる。

超然としたキャラクターを好演した森川葵(もりかわ・あおい)は1995年愛知県生まれ、21歳の注目株。男からモテまくり、女からは嫌われるヒロインを演じた映画『**おんなのこきらい**』(2014、監督・加藤綾佳)や、ミュージシャン・さだまさしの高校時代の同級生に扮したNHK『**ちゃんぽん食べたか**』(2015)など、集団の中でひとり遠くを見つめている「**孤高のマドンナ**」役がよく似合う。今年も東映の時代劇『**花戦さ**』(監督・篠原哲雄)をはじめ、多くの作品で活躍が期待されている。



『**逃げるは恥だが役に立つ**』
TBS系 火曜 夜10:00~
2016年10月11日~12月20日放送
全11話
原作/海野つなみ
脚本/野木亜紀子
演出/金子文紀 土井裕泰 ほか
【DVD-BOX】
2017年3月29日発売予定



“住み込みの家政婦” 森山みくり
(新垣結衣)



『**プリンセスメゾン**』
NHK-BSプレミアム
火曜 夜11:15~
2016年10月25日~12月13日放送
全8話
原作/池辺 葵
脚本/高橋 泉・松井香奈
演出/池田千尋・大橋祥正



居酒屋の店員 沼越 幸
(森川 葵)

【労働映画のスターたち】第17回「三浦 友和」 文：百永良武

日本が誇る愛妻家…人生の「役どころ」を引き受ける生き方

40代から上の世代と、その下の世代とでは、《三浦友和》という名前から受けるイメージは大きく違うのではないかと。1980年、当時日本で一番有名な女性歌手と結婚した彼は、まだ28歳。人気絶頂の彼女が“結婚したら仕事をやめます”と宣言した時は、日本中のお茶の間から“大丈夫？”と心配する声が聞こえた(ような気がする)。本人も相当重圧を感じたようで、婚約の会見では“彼女にふさわしい夫になりたいと思います”と発言していた。絵に描いたような好青年だが、将来はどうなることやら……。

あれから40年近く経った今、65歳になった彼は主演・助演のどちらでも抜群の存在感を見せている。「百恵・友和」の時代を知らない世代にも注目してほしいのは、彼が奥さんの意志を尊重し続け、「一主婦」となった彼女を四六時中追い回す芸能ジャーナリズムから守り、数々の苦勞を乗り越えてひとつの「家庭」を作り上げた結果、いつのまにか(?)独特の個性を持つ「名優」になっていた……という事実だ。現代の日本でも指折りの愛妻家として知られる友和さんの作品歴を辿ると、自分に舞いこんだ「役どころ」を引き受け、その人物を「生きてみせる」という姿勢が浮かび上がるのだ。

1952年、山梨県生まれ。小学生の時、駐在だった父がサラリーマンに転身したのを機に東京へ引越す。都立日野高校への通学バスが一緒だった「栗原くん」、後のミュージシャン・忌野清志郎と仲良くなったことが、その後の進路を大きく変えることになる。大学には行かず、アルバイトに明け暮れながら「RCサクセッション」の楽器運びを手伝っていた時、たまたま俳優の事務所を紹介されてデビューすることになった。

1970年代ならでは長髪を切ったら、七三分けや角刈りの似合う古風な青年として重宝がられた。グリコのCMで新人・山口百恵のボーイフレンド役を探していた大林宣彦監督は、「笑うと歯がキラッと光るような男の子」というイメージにピッタリの彼を起用する。百恵の初主演映画『伊豆の踊子』(1974)の書生役も、西河克己監督がグリコのCMを見て決めた。その後も映画・ドラマで共演し続けた2人は結婚に至るのだが、ここまでのキャリアはある意味、成り行き任せにも思える。だが、日本中に祝福された「王子様」の将来を、この時点では誰も予想できなかったのではないかと。

30代に入った1980年代は、アイドルから「大人」に脱皮するための試行錯誤が続いたが、相米慎二監督の異色作『台風クラブ』(1985)で、かつての好青年が「身を持ち崩した」感じの中学教師を演じたことで、新たな道が開けていく。ちょっと胡散臭いタイプの人物も、「元・好青年」が演じれば絶妙なリアリティが加わる。竹中直人の初監督映画『無能の人』(1991)では、多摩川沿いの競輪場に通う職業不詳の男として登場。竹中演ずる貧乏漫画家が開いた「石屋」の商品棚を眺め、「孤独」、「後悔」、「涙」……まるで俺みてえだななんてセリフを呟く姿が見事にハマっていた。

40代に入ってからにはエリートサラリーマンをはじめ、医師・弁護士・刑事といった役柄が多くなるが、どこか「ダメな部分」も持ち合わせた人間味が自然に出ているのが魅力となっている。諏訪敦彦監督の『M/OTHER』(1999)では、前妻との間にできた息子の世話を同棲相手に押し付け、三木聡監督『転々』(2007)では見知らぬ青年を「擬似家族」に巻き込み、山下敦弘監督『松ヶ根乱射事件』(2007)では若い女性を妊娠させ……という具合に、いずれの作品でも「男のダメさ」が味わい深い。

近年は塙幸成監督の『死にゆく妻との旅路』(2011)、蔵方政俊監督『RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ』(2011)など、夫婦愛をテーマにした作品も多い。神山征二郎監督の『救いたい』(2014)では、“私は子供を産めなかった”と詫げる妻(鈴木京香)に対し、“たとえ女房でも、俺の大事な女房の悪口を言うヤツは許さんぞ”と、荒っぽい言葉でガッチリいたわってみせる……いつか真似してみたい(笑)

去年は、傲慢な性格が原因で一家を崩壊させてしまう父親を演じた『葛城事件』(2016、監督・赤堀雅秋)が高く評価され、今年に入ってから、リストラに遭いながらも一家の主として踏ん張る男を演じるドラマ『就活家族〜きっと、うまくいく〜』(2017、テレビ朝日)が好評だ。硬軟どちらも体現できる「愛妻家スター」の活躍が、これからも楽しみです！

参考図書=『被写体』(三浦友和、1999年)、『相性』(三浦友和、2011年)



伊豆の踊子 (1974)



台風クラブ (1985)



無能の人 (1991)



救いたい (2014)



葛城事件 (2016)



就活家族 (2017)